

会員の広場



経済倶楽部と私 ―再入会を果たして

野田 忠男（東京）

去る9月、私は5年ぶりに経済倶楽部の会員に復帰しました。その数カ月前、日本銀行政策委員会審議委員の5年間をあえぎあえぎしながらも完走し、待望の「Freedom is beautiful.」を実感し始めたある日の昼下がりのことです。

中央通りを西へ曲がって日銀本店にぶつかると一方通行の通り（大伝馬本町通り）と呼ばれていると後日知りました）を歩いていると、「シティ・ツアー」の小

旗を掲げた中高年の小集団に遭遇しました。耳をそば立てるとガイドらしき男性が「この辺り一帯は徳川家康が江戸入府した際、最初に開発した所ですから『本町』と名づけられました。したがって、この通りは『本町通り』といえます」（日銀を指差しながら）ご覧のとおり今は日銀が邪魔をして向こうは何も見えませんが、江戸の昔は通りの先に富士山がくっきりと見えたものです」と解説しています。

私はハタとひびきを打ちました。「そうか、やはりこの道は外堀通りまでまっすぐに延びていたのに違いない。それが日銀本店新館の建設で付け替えられたのだろう」と。同時に、3年前の経済倶楽部での講演を思い出していました。講師は誰であろう、この私です。帰宅後直ぐに『経済倶楽部講演録 2008・9』を開きました。その冒頭近くの「経済倶楽部と日銀のご縁」という小見出しのある一部を引用します。

当経済倶楽部は日本銀行とのご縁もたいへん深いも

のがあります。（中略）私のオフィスがあります日本銀行本店の新館、といっても1973年の竣工で決して新しくはないのですが、その新館がある場所は、東洋経済の本社があった場所であり、77年前の1931年に当経済倶楽部が誕生した場所であります。

ここから先を書くにあたって、前述の推論の傍証を固めなければなりません。まず『日本銀行百年史』ではまったくの空振り。『日本銀行八十年史』には「本店の土地・建物」という項で、土地は「数次にわたり公道の改廃・不用地の処分・買増し・町名変更などが行われ、現在は東京都中央区日本橋本石町一丁目から三丁目にわたる七千百坪となっている」という記述にとどまっています（傍点は筆者）。

そこでいよいよ『東洋経済新報社百年史』の登場です。「高度成長時代前夜の経営」という章の第四節「新東洋経済ビル」の建設に次の記述がありました。

道路を隔てて当社の南側に本館を構えている日本銀

行が、新館建設のため東洋経済所有地の譲渡を希望し、見返りに代替地を提供すると申し入れてきた。（中略）そして、五九年二月二五日に日銀との間で「土地交換および建物売買」契約が結ばれた。

最後は地籍図の確認です。明暦3（1657）年の「江戸大総図」と昭和27年の「要覧地籍図」を並べてみると、共に「本町通り」はびびたりと重なり合い、「外堀通り」に向かって真っ直ぐに伸びています。後者は東洋経済が、「本町通り」が「外堀通り」にぶつかるT字路の北側角地を占めていたことも示しています。

思えば、私が現在の「本町通り」が雁行していることの不自然さについて疑問を感じ始めたのは、都銀の担当者として日銀本店（記者クラブを含む）に頻繁に出入りしていた1980年代初頭でした。30年という歳月を経てやっとその疑問を解消することができましたが、それについても経済倶楽部との「ご縁」の深さを強く感じている次第です。